

マルチ・メディアの学園都市史 Part II

—14の大学による生涯教育で、IT時代をリードする
「まちづくり」を通してヒトのココロを育て、市民意識を高める—

片柳 健

[1] シルクロードの都・町田市

現在、私が住んでいる横浜市と故郷の八王子市とに挟まれた町田市を取り上げてみようとする。町田市の中心にある町田駅は、工芸大学に通っていた頃からの乗換駅として親しんで20年近くなる。現在の駅周辺の都市化への様相を知るだけでなく、その都市の歴史を知ることによってIT時代をリードする町田市の「まちづくり」の方向が分る様に考えられる。町田市は、中世から近世にかけて、現在の市域の基盤となる25箇村が次第に一本化されて鎌倉街道と神奈川街道を軸に形成された。

明治初期に横浜港が開港された頃には、外国からの絹糸の需要が多く、この需要に答えるため、絹の産地である甲府、八王子から原町田を経て多量の絹が輸出用として横浜港に運び込まれた。そこで、甲府、八王子から原町田を経て横浜に向かう街道は、「日本のシルクロード」とも呼ばれ、多くの商人が忙しく行き来した。従って、原町田は宿場町として賑わい発展するようになった。当時、原町田には「二・六の市」がたち、既に商業のにぎわいがあった。また、この「シルクロード」を通じて自由・平等・人権尊重などの新しい思想も伝えられ、原町田で生まれた。中でも明治初期の自由民権運動はその代表的なもので、こうした伝統は今でも市民活動の盛んなまちとしての特性の一つとして引き継がれている。

その後、明治26年に原町田は、神奈川県より東京府に移管され、昭和33年に東京都の第9番目の市として市制が施行された。即ち、昭和33年(1958年)2月1日、町田市は、原町田町、鶴川村、忠生村、境村の1町3村が合併して、誕生した。当時の人口は6万人余りで、全世帯の4分の1は農家であった。しかし、首都東京の膨張に伴い、交通の便がよいこと、住宅地として適していたことから、人口の急増に見舞われることになり、一時は「全国

一の人口急増都市」と言われ 37 万人(平成 11 年 7 月 1 日現在)にまで膨れあがった時もあった。東京都 27 市中、八王子市に次いで 2 番目に人口の多い都市となった。その結果、学校を始め、あらゆる都市施設の不足をきたし、公共施設の充実が強く要請された。一方町田市の交通面では、明治 41 年に横浜鉄道(現在の JR 横浜線)が開通し、原町田駅(現在の JR 町田駅)が設けられ、昭和 2 年には、小田原急行鉄道(現在の小田急線)が開通し、新原町田駅(現在の小田急町田駅)が開設され、都心の新宿と直結することになった。

さらにその後、東急田園都市線の開通、東名高速自動車道横浜インターチェンジの共用開始等によって、交通の結節性は飛躍的に高まった。

[2] 町田学園都市へ

次に町田市の学園都市化への過程について考察する。町田市には都心から、同じ東京都内であることと大学の規模の拡張ができることから 14 校にも及ぶ大学の移転が行なわれた。或は、新しく開校した大学も現れた。具体的には、玉川大学が昭和 22 年、桜美林大学が昭和 25 年、国士舘大学が昭和 40 年、国士舘短期大学が昭和 40 年、和光大学が昭和 41 年、東京服飾造形短期大学が昭和 42 年、鶴川女子短期大学が昭和 43 年、東京女学館短期大学が昭和 53 年、法政大学が昭和 59 年、東京家政学院大学・短期大学が昭和 59 年、昭和薬科大学が平成 2 年に開学された。従って町田市は、東京都では都心と八王子市について多くの大学が存在するようになった。さらに、全国的には、京都市、筑波学園研究都市に続く学園都市であるが、これらの都市の大学と異なる点は、町田市の大学は、町田市を発祥の地として開学された大学と、都内の大学から校舎の拡大のため移転してきた大学とに大きく分けられ、いずれも、大学独自の意思決定により進出し、市政などの働きかけによるものではないことである。町田市が学園都市として発展してきた理由は、東京都内にある町田市に大学を設けることは、東京の大学というイメージに沿ったものとなり、かつ昭和初期から戦後かけての時期に学園を作るために必要な広大な面積の土地の取得が可能であり、しかも小田急線が出来たばかりで、その駅の周辺に土地を取得することが可能であったからと言える。八王子市では大学の多くが郊外にあるのと比べて町田市では小田急線・横浜線の駅の近くに出来た大学が多い。

また、将来人口は 45 万人を想定しており、その都市像実現に向けて、成長管理に基づく「まちづくり」を推進しつつある。そうした中で、人口の増

加から学生が増加するだけでなく、社会人からの学習意欲が高まり、例えば玉川大学では、玉川大学公開講座や通信教育としての夏のスクーリングや春の夜間スクーリングなどを開講していて開かれた大学を目指しており、桜美林大学は、新宿にオープンカレッジや、サテライトの夜間大学院を2001年4月に開講する予定であり、公開講座も開講する予定である。また、和光大学のオープンカレッジ「ぱいでりあ」は、鶴川駅前に出張して公開講座を開講している。次に、東京家政学院大学においても、多摩キャンパスで公開講座を開講している。さらに、国士舘大学においても、生涯学習センター準備室を作り、社会人への公開を計画している。さらに、法政大学は、地域市民のために多摩図書館の開放、或は、都心の市ヶ谷において社会人の大学院制度(人文科学、社会科学、一部分工学)の夜間開講、学部においても二部文学部、経済学部、法学部、社会学部、人間環境学部等があり、通信教育部において法学部、文学部、経済学部が開講され多摩キャンパスにおいてもスクーリングが一部分開講するとのことである。将来、通信教育の大学院も計画中であると言われている。益々ひらかれた生涯学習社会の到来が予想される。

人口が急上層する中で、中高年で学習する人々が増加し、これらの講座を小田急ケーブルビジョンの「まちだテレビ局」を通して、町田市内の各家庭に放送を流すようになることが実際に実現しようとしており、例えばコミュニティ11ですでに一部流していると言われている。将来、14の大学の講義が放送大学の様に各家庭で見られるようになれば、町田市の学園都市としての高度の発展が期待される。

[3] 町田市の現状特性

東京圏では昭和25年代後半から人口、産業の集積が顕著に進展し、都心部の過密化と地価高騰は町田市を始めとする郊外部への人口の外延化を促進した。町田市では、特に、昭和35年代から昭和45年代にかけて人口が急増し道路、下水道、学校などの都市基盤・都市施設の遅れが問題となった。こうした状況に対処し、昭和45年には全国に先駆けて「宅地開発指導要綱」が、昭和47年には「集合住宅建設指導要綱」が制定され、乱開発を規制するとともに人口抑制の視点から「まちづくり」を推進してきた。

また、山積する多種多様な問題に対し、「考えながら歩くまちづくり」を指針に、市民の参画を得て、試行錯誤を繰り返す中で解決を目指した。

その結果、様々な分野で時代を先取りした成果を得るとともに、今日の町

田市における行政運営の特徴的なスタイルが確立されようとしている。とりわけ、「車椅子で生活できるまち」に代表される福祉の取り組みは、内外で高く評価されている。また、ゴミの分別収集にも早くから取り組み、リサイクル活動を展開するかたわら、緑の保全と育成に関する条例を制定するなど環境に配慮したまちとしての特色も目指している。

一方、人口集積を背景として、町田駅周辺を中心に商業集積、横浜線原町田駅、小田急線新原町田駅の両駅統合及び再開発とも相まって、広域的な商業拠点としても発展してきた。近年では国際版画美術館など、市民の誇れる施設も整備され、東京圏西部における拠点都市として多面的な都市施設が充実しつつある。さらに、10月4日に「ぱ・る・るプラザ MACHIDA」がオープンした。これは、地域の人たちが学習や文化、余暇活動などに利用できる場所として、郵政省によって設置されたもので、館内は多目的スタジオや会議室をはじめ、レストラン、シネマシアターなど、楽しい嗜好が盛り込まれた新しい施設が建設された。これも町田のランドマークの一つとして文化拠点になると考えられる。

[4] 町田市の現状特性

(1) 多摩丘陵に抱かれた豊かな自然環境をもつ都市

町田市は、多摩丘陵の南側傾斜に位置し、市街地のほとんどは丘陵地形の上に広がっている。丘陵部には、鶴見川や境川などの源流域が存在し、東京圏近郊地域における貴重な自然環境として位置づけられている。

しかし近年は、急速な宅地開発の中で、多摩丘陵の緑や自然環境は急速に失われつつある。

(2) 東京圏の商業拠点都市

町田市は、広域的な交通結節性と急速な人口の増加を背景として、町田駅周辺を中心とする百貨店などの商業集積が進み、人々でにぎわう東京圏西部における商業拠点として発展してきた。

東京都第三次長期計画では、町田市は多摩の「中心都市」の一つとして位置づけられ、商業機能を始め、一層の都市機能の充実が期待される。

(3) 住宅のまち

町田市は、かつて東京都心への1極集中を背景とした人口の外延化の中

で、大規模な団地造成が行われて、「団地のまち」と呼ばれたこともあった。

この大規模な団地造成に伴う急速な人口増加に対して、当時の産業は零細企業が中心であり、東京都心や横浜市への通勤流出が多く、いわゆるベッドタウンとしての性格も有していたが、これらの団地造成に対応して、必ずしも基盤整備が十分に行なわれていないことが問題点として指摘されている。

(4) 市民活動の盛んなまち

明治時代に原町田で培われた自由民権の精神は、今日でも多彩な市民活動として息づいている。戦後の町田市市民活動を振り返ると、昭和35年代から昭和45年代にかけて団地開発に伴い転入した人々が「まちづくり」の担い手となり、盛んな市民活動を展開した。その後この市民活動は、後世へと引継がれて現在に至っている。

その結果、スポーツ活動、文化活動、福祉活動、環境保全活動をはじめとして、様々な特徴的な取り組みが展開され、成果に結びついている。

(5) 活力あふれる若者のまち

町田市には四年制の大学が7校を始めとして、短期大学、専修学校、さらに予備校等が多数立地しており、学園都市としての特徴を持っている。そこに通う学生たちを始め、多くの若者たちが市内に集い、あふれるばかりの賑わいを生み出している。こうした若者達の存在は、町田市における活力の源の一つともなっている

[5] 社会環境変化に対する基本認識

一方、町田市を取り巻く社会環境は、近年、大きく変化している。将来の町田市を考えるに当たっては、以下に示す社会環境の構造的な変化を踏まえることが不可欠である。

(1) 長寿社会の形成

町田市の人口構造は、現在、比較的若い年齢構造となっている。しかし、今後は加速的な高齢化の進展が見込まれる。そのため、高齢者が安心して暮らせる長寿社会とはどのような社会であるかを真剣に考え、その実現に向けた取り組みを進めることが急務となっている。

特に、長寿社会の形成に向けて、様々な分野における福祉の法制化が必要

とされている。

つまり、これまでのように、特定の人やセクションだけの努力にゆだねるのではなく、様々な分野の人々がハンディキャップを持つ人の立場を考え、自分も仲間だという意識を持って真の福祉社会実現を目指す必要がある。

また、高齢者のために施策を充実するとともに、明日を担う市民の育成も重要な課題である。

子供たちが健やかに育ち、豊かな人間性を育む環境づくりに努めていく必要がある。

(2) 豊かさ指向の定着化

人々の豊かさ指向は年々進展し、その内容もモノを所有する豊かさから、サービスを楽しむ豊かさへと移行し、さらにはココロの豊かさを重視しつつある。この傾向に伴う自由時間の増大は、その過ごし方についての関心を高め、積極的に自由時間を活用しようとするニーズがさらに強まることが予想される。そこで、生涯にわたり市民が自主的に意欲を持って取り組める生涯学習社会を構築して行くことが重要である。また、市民が享受できる様々なサービスの充実を図り、日常化するレクリエーションなどの場や機会を身近なところに整備し、市民生活の豊かさを高めていくことが必要である。

(3) 共に生きる社会ニーズの高まり

コミュニティ活動を通じて、地域連帯を高めていくことが重要であり、再認識されつつある。また、女性の社会進出に伴い、障壁となっている諸問題については、誰もが共に考えていねばならない。一方、国際化が進む中で、町田市に住む様々な国の人々と共にたのしく暮らせるよう、彼らの生活習慣や考え方に対する理解を深めることも重要である。

これからは、人権尊重の理念に基づいた生き方は、様々な人々と共に生きる社会の構築を目指す上で基本的な課題であり、まちづくりのあらゆる場面で行政、市民、事業者が相互に取り組んでいく必要がある。

(4) 環境保全型社会への前進

環境保全への意識が地球的規模で高まりつつある。

町田市では、これまで緑を守る方向でまちづくりを推進してきたが、大都市近郊において自然と自然との共生を図り、緑豊かな生活環境を整備することは、これまで以上に大切に考えていかねばならない。また、町田市が先進

的に取り組んできたごみの減量・リサイクル活動についても、引き続き取り組んでいく必要がある。

町田市民は、自分のまちを、誇りを持って次の世代に継承するために、21世紀における真に豊かで快適な環境保全型社会とは何かを真剣に考え、その実現を果たして行かなければならない。

(5) 東京圏における多核多圏域型地域構造の形成

近年、東京圏では一極集中を是正するため、事務核都市等の整備を通じて、多核多圏域型地域構造の形成が進みつつある。オフィスをはじめ商業や住宅などの周辺地域への外延化を背景として、町田市周辺都市においても、都市機能が集積され、職住近接の生活環境づくりが進められている。

町田市も、人口規模や交通の結節性を生かして職の場の集積を高めるなど、暮らし易い自立ある圏域の形成に向けて、拠点都市としての役割を担うことが期待されている。

21世紀に向けて、周辺都市との連携を図り、町田市が持つ資質を生かして広域に対する貢献を果たしていくことがますます重要になっている。

[6] 町田市の自然環境

町田市は、東西に連なる多摩丘陵を骨格として、境川、鶴見川、恩田川の三水系を有し、清流や谷戸地形、クヌギ、コナラの雑木林、河川沿いに広がる田園風景など、生態系を育む自然が各所に見られる。

これらの自然環境は、市民の生活環境を守るとともに、「まちづくり」の舞台や市民活動の場、農業生産の場として、さらに防災空地として、「まちづくり」の重要な要素となっている。

また、近年、地球の温暖化、オゾン層の破壊、酸性雨、ダイオキシン汚染など、人々の生活様式、経済活動に起因した人類の存続に関わる地球規模の環境問題が明らかにされ、都市における身近な自然環境の減少に伴って、都市環境を支える自然環境や生物の生息環境の保全、回復、創出に関する関心が特に高まっている。

このため、市民の森制度、緑地保全の森事業、各種開発にあわせた良好な緑地の確保、新たな都指定保全緑地の要請、緑地整備に係わる水資源・動植物の保全、委託栽培による農地の保全、市民ボランティアによる動植物の保全など、さまざまな施策を展開している。

町田市は「まちだエコプラン」に基づき生物の多様性を育む水と緑の環境を継承し、豊かな多摩丘陵の自然と共生できる自然環境を保全、活用する生態系ネットワークの形成に積極的に取り組んでいる。生態系を保全・再生し、多摩丘陵の風土を生かしながら「まちづくり」を進めるために新たな道標として作成した町田市独自の計画である。地形や水環境のシステムを重視した「小流域」を基本単位として、生態系ネットワークをつくることをも目指しているプランである。

[7] 市民文化活動の促進

(1) 現状と動向

町田市では、従来市民自らの手による文化・芸術活動がさまざまに展開されてきた。また、町田市では新たな創作活動を支援するために各種講座を開設したり、ホールや展示室など発表の場の提供を行ってきたが、近年はそのような講座の参加者や、展示室や各施設のホールなどの利用希望者が増加している。また、文化協会の設立など、新たな団体相互の交流・連携の動きが見られる。

このような市民文化活動の盛り上がりに応じて、さまざまな領域の文化活動に対して必要な援助が求められている。

市民の手による多彩な芸術・文化活動が自由に展開されるように、仕組みづくりや施設拡充など必要な支援を進められている。

(2) 施策展開の方向

町田市では文化講座やイベント等の充実に伴って、多様化し、高度化しつつある市民の文化に関する意識に対応して、より質の高い広範な分野の講演会、講習会などのプログラムの展開が計画されている。

また町田市は、市民自らの手による創造的活動の普及を図るため、多彩なイベントを開催し、市民が日常的に芸術・文化と触れ合う機会の提供に努めている。

また町田市は、市民の文化活動に対する支援の方策として美術・工芸・音楽・文芸など、新たに活動を始めようとする市民に対し、講座やイベント、団体、指導者の紹介など、仲間づくりや自主活動に関する情報提供・相談機能の充実に努め、公民館・コミュニティセンターなど地域を中心として活動している市民文化団体の活動を支援するとともに、団体相互の交流の機会の

充実を努めている。

また町田市は、手作り市民文化活動の場を提供すると共に、市民の自由な創作活動を支援するため、制作、練習や成果発表の場の確保と設備の充実を図り、市立小中学校の余裕教室を市民文化活動の場として活用している。

[8] 町田市の芸術・文化の充実への取り組み

芸術・文化に親しむことに対する市民の期待は年々益々高まるとともに、関心も多様化し、広がりを見せている。

そこで市では、市民ホール、国際版画美術館、博物館等でそれぞれ多彩な催し物を行い、また1993年には、TAMAらいふ21(多摩東京移管百周年記念事業)の一環として、新しい発表形式の場の開発や芸術家の育成を目的とした、アーティスト・イン・レジデンス事業を行うなど、市民が楽しんで芸術・文化に触れ合うことができるように努めている。

市民ホールについては、市民文化都市にふさわしい施設の拡充を検討している。国際版画美術館については、支援団体である友の会の発足を機会に、より市民に愛される版画美術館づくりを、博物館については、施設の狭隘化に対する検討が求められている。

芸術・文化に対する市民の期待に応え、市民が身近な場で芸術・文化に触れ合う機会をもつことができるようにするため、施設の拡充を進めるとともに、すぐれた作品を気軽に鑑賞できる事業の展開が望まれている。

市民ホールの拡充においては、舞台芸術をはじめ、すぐれた作品に親しめるよう、市民ホール事業の充実を図るとともに、利用者の利便性の向上に努めている。自主事業の計画・施設等で柔軟な対応ができるよう財団法人の設立を検討しており、市民文化都市にふさわしい新ホールの建設を目指している。

また、国際版画美術館・博物館の充実においては、市民がすぐれた作品に触れ合えるよう展示企画を充実するとともに、芸術家の招へい事業なども計画されている。ミュージアムグッズ・コーナーや各施設、催し物、案内コーナーの設置、収蔵品の映像紹介など、より親しみやすい施設づくり、プログラムづくりも計画されている。また、収蔵資料の充実や収蔵品・図書類の的確・迅速な情報提供の方法等も検討されている。

文化ゾーンの形成において、芹ヶ谷公園一帯や七国山(薬師池)周辺を文化ゾーンとして形成するため、国際版画美術館やふるさと農具館など既存の施

設と相乗効果をなすように、小博物館(文学・美術工芸・音楽)の配置など、環境整備を検討している。

「ぱ・る・るプラザ町田」は、地域住民が学習・文化及び余暇活動等、多目的に利用できる施設を目指しており、多目的スタジオ、ミニスタジオ、会議室、シネマシアター、レストラン等々の施設を通して新世紀へ向かって文化を発信していく予定である。

[9] 町田市の生涯学習体系の確立への取り組み

現状分析と動向

少子高齢化・国際化・高度情報化など、これまでにない大きな社会変動と、週休二日制の普及などに伴う自由時間の増大は、常に新しい知識・技術などの習得への要求や、自分らしく創造的に生きたいという欲求を生み、それは市民の学習・文化・スポーツ活動に対する関心の高まりとなって現れている。

こうした市民の学習要求の高まりに、図書館、公民館、国際版画美術館、博物館、市民ホール、市民大学などからの資料・情報の提供や催し物あるいは各種講座などの開催を通じて、さまざまな分野で独自の施策を展開し、充実を図ってきている。

また、従来よりも盛んな市民活動に加え、これらの事業から数多くのサークル・団体が生まれ、現在も活発に活動している。

今後は、生涯学習社会の実現に向けて、さまざまな教育機能が有機的に連携を図る中で、高度化・多様化する学習要求に答えることができる環境の整備が強く求められている。

基本方針

市民一人ひとりが最も適した自発的な学習活動を展開し、積極的に物事に取り組もうとしている人々に活動の機会を与えることができるよう、その時々年齢に応じた総合的な生涯学習推進体制を整備する予定である。

また、生涯学習に関する情報提供・相談機能の充実を図るとともに、生涯学習の振興を図る拠点を整備する予定である。

施策展開の方向

(1) 生涯学習推進体制の整備

生涯学習のための条件整備を計画的に進めるために、生涯学習推進計画を策

定する必要がある。さらに計画を積極的に実現するために、行政内部における調整機能を強化すると共に、関連諸機関・団体との連携・協力体制を確立する必要がある。また、市民がまちづくりの担い手として効果的に生涯学習を進めて行くために、教育機関相互の機能連携、情報収集・提供、相談などの、ネットワークの中核としての生涯学習拠点を整備する必要がある。

(2) 生涯学習推進ネットワークの形成

地域の学習環境を醸成し、活性化していくため、学校教育と社会教育の連携・協力を促進する必要がある。さらに、市民の高度化・多様化する学習要求に応えるため、市内の高校・大学・専門学校等の教育機関や国・都・近隣市町村の事業、及び民間企業等との連携・協力を促進する必要がある。また、市内の学習機能を有した様々な施設を市民が有効に活用できるように、学校教育機関や民間をも含めた生涯学習関連施設の体系化を進める必要がある。より豊かな学習活動が行なえるよう、市民サークル・団体のネットワーク化を積極的に支援し、市民が共に学び合う環境を整備し、市内の人的資源の有効活用を図るため、生涯学習人材バンクを設置する必要がある。

(3) 学習情報提供サービスの拡充

市民一人ひとりが主体的な学習・文化活動を進める上で、必要な情報を的確に得られるよう、その情報の広域的な収集・提供システムを確立し、市民が気軽に学習活動に関する相談が出来るよう、学習相談機能の充実を図る必要がある。

(4) 市民大学中央キャンパスの設置

小中学校の統廃合により廃止となる学校の校舎を活用するなど、市民大学の活動拠点となる中央キャンパスを設置する必要がある。

[10] 町田市の生涯学習構想

町田市は、人口の増加率が高く、若い世代が多い中で、活力ある活動を基に、IT時代に対応できる人的資源が多い。その中で町田市と共生ができる大学生や短大生等、ITを使うことができ、かつ人に教えることができる柔軟な頭脳を持った学生達が、中心となって互いに利用しあったり、教えあったり、することにより家庭内にまで影響を及ぼすようになり、パソコンを利

用できない中高年及び低学年の児童にまで広まって行くのではないかと考える。

一例として、今話題に乗っている BS デジタル放送の大きな魅力がこのデータ放送である。これまで観るだけだったテレビから、欲しい情報を必要な時に引き出せる全く新しいサービスが可能なテレビに変わろうとしている。この新しいテレビの電話回線を利用した機能には EPG と呼ばれる番組ガイドや、データ専門局の放送、番組の中で関連する更に詳しい情報を引き出す連動型のもの、クイズ番組に解答者として参加するようなインタラクティブ(双方向)なものなどの種類がある。観るテレビから使うテレビ、即ち「生活をより便利で豊かにするサービス」「緊急時に役に立つサービス」という理念に基づいて、欲しい情報を欲しい時に呼び出せるテレビの放送が開始されようとしている。将来的には、BS デジタル放送を足掛かりとして、段階的に ISDB(統合デジタル放送)として発展させていく予定である。これは多チャンネル映像、動画、静止画、音声などのあらゆるデータをデジタル管理し、自動的に収録・保存した情報を観たい時に自由に観ることができる夢のマルチ・メディア・サービスである。家庭のテレビだけでなく、車や携帯端末でも情報の取り出しが可能になる。

おそらく、放送大学の大学院も 2002 年前後からスタートすることを考えると、インタラクティブでオン・デマンドによる授業が展開されると考えられる。これの町田市版として 14 の大学群の協力のもとで、町田市民の生涯教育を行うことにより、IT 時代をリードする「まちづくり」が実現できると考えられる。また小田急ケーブルビジョンの「まちだテレビ」局を通して、町田市内の各家庭に放送を流すことができるようになれば、町田市の市民の生涯教育としてテレビによる通信教育が可能となり、都市を美しく、個性と魅力ある地域を育ててゆく都市デザインが可能となり、その地域にふさわしい個性ある環境をデザインする協働の発想にたつことが可能になる。その「まち」の風土と歴史から、その地にふさわしい個性を見付けだし、また創造してゆくことである。都市の発展には、多くの困難な問題や、さまざまな矛盾を伴うことが多い。だからこそ、市民が協力して行なう新たな「まちづくり」が必要になるのである。

町田市の風土と歴史は、交通の結節点と自由民権運動などから来る市民活動であり、協働の発想から町田市の学園都市としての高度の発展が期待され、そのためにはヒトのココロを育て、市民意識を高めて行くことが必要と考えられる。

[11] 参考文献

- 1) 「町田市基本構想・基本計画」多摩丘陵にはばたく市民文化都市——発行 町田市 編集 町田市企画部企画政策課, 1993.
- 2) 「町田市基本計画(前期改定版)」多摩丘陵にはばたく市民文化都市——発行 町田市 編集 町田市企画部企画政策課, 1999.
- 3) 「町田の教育'99」 町田市教育委員会, 1999.
- 4) 「2001 玉川大学大学案内」(世界に通用する人づくり [玉川 21世紀プロジェクト] 進行中) 玉川大学, 2000.
- 5) 「玉川大学通信教育部 2000」 玉川大学, 2000.
- 6) 「桜美林大学 2001」 桜美林大学, 2000.
- 7) 「桜美林大学 2000 オープンカレッジ」 桜美林大学生涯学習センター, 2000.
- 8) 「大学案内 2001 対話する大学 国士舘大学・国士舘短期大学」 国士舘大学・国士舘短期大学, 2000.
- 9) 「和光大学 2001 地球が私たちのキャンパスです」 和光大学, 2000.
- 10) 「和光大学オープン・カレッジ ぱいでりあ 2000 ご案内」和光大学, 2000.
- 11) 「2001 年度 服飾造形科 東京服飾造形短期大学」 東京服飾造形短期大学, 2000.
- 12) 「鶴川女子短期大学 幼児教育科 大学案内」 鶴川女子短期大学, 2000.
- 13) 「2000 入試案内 東京女学館短期大学」 東京女学館短期大学, 2000.
- 14) 「2001 大学案内 法政大学」 法政大学入試センター, 2000.
- 15) 「2000 入学案内 法政大学通信教育部 無限大の未来に」 法政大学通信教育部, 2000.
- 16) 「法政大学 エクステンション・カレッジ HELP 2000 年度」 法政大学 エクステンション・カレッジ, 2000.
- 17) 「東京家政学院大学・東京家政学院短期大学 2001 大学案内」 東京家政学院大学・短期大学, 2000.
- 18) 「やりたいことが、きっと見つかる。 昭和薬科大学」 昭和薬科大学, 2000.
- 19) 「町田市民フォーラム」 町田市, リーフレット, 2000.
- 20) 「小田急ケーブルビジョンまちだテレビ局」株式会社小田急情報サービス, 2000.
- 21) 『まちづくりの発想』 田村 明 岩波新書, 1987.
- 22) 『まちづくりの実践』 田村 明 岩波新書, 1999.
- 23) 『都市ヨコハマをつくる』 田村 明 中公新書, 1997.
- 24) 『こころの情報学』 西垣 通 ちくま新書, 1999.
- 25) 『マルチメディア』 西垣 通 岩波新書, 1984.